せとる　くおーたりー
C. E. T. L. Quarterly
教育・学習活動支援センター広報　No.6　発行日　15. May. 2002

巻頭言　授業を考える

経済学部長　長谷部　秀孝

私は、一昨年にFDの講習会に参加して以来、授業方法や内容を考えることの重要性を再認識し、自分自身で実践するとともに、経済学部としても積極的に進めたいと考えている。すでに、積極的に講習会に参加するなどの行動をとっている教員もおり、いくつかの授業では実践されている。そこで、授業改善について経済学部の実情を見てみたい。

まず、よい講義を行うためにも講義の内容を見直さなければならない。あまり欲張って盛りだくさんの内容を詰め込むのではなく、何を教えるべきか内容の絞り込みをしている。その基準として、学生の興味を誘うようなインセンティブを与えなければならない。そこで、なるべく身近で起こっている社会現象などを取り上げるようにしている。社会科学である経済学を勉強するためには、新聞などで社会の出来事にふれることが必要であるが、学生はなかなか新聞を読もうとしない。授業の中でその必要性がわかってもらえるように仕向ける必要がある。

次に講義の方法であるが、一方的に教員が話すだけの講義ではなく、学生にも発言の機会を与える双方向型の授業が望ましい。その場合でも、グループで作業をさせたり発表をさせたり、ある個人に偏らないで全員が参加できるような工夫が必要である。経済学部の授業は、場合によっては300人を越えるような大人数で行われることが多く、双方向型の授業は難しいと考えられてきた。しかし、何人かの教員によって大人数でも不可能ではないことが確かめられている。

最後に、教育機材の利用である。パソコンについてはすでに何人かの教員が授業で利用している。アメリカでは積極的にコンピュータを利用した講義の方法と資材が開発されている。経済学はコンピュータの利用しやすい科目と思われるが、その開発には多額の資金と多大な時間の投入が必要で、まだそこまでは踏み切れないでいる。この開発などは学習支援センターの援助があれば、非常にスムーズにいくのではないかと考えている。単に黒板に書くだけではなく、パワーポイントのスライドを用いての授業は私も行っている

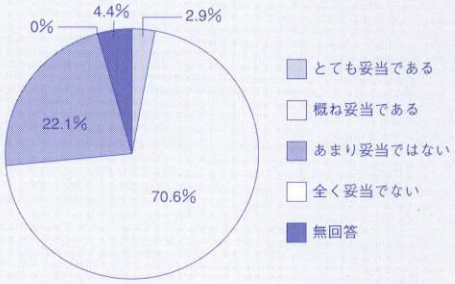
大学においては、ともすると今までのものがよいという保守的な考えになりがちである。そのような考え方の打破に向けて、センターが積極的に働きかければと考える。

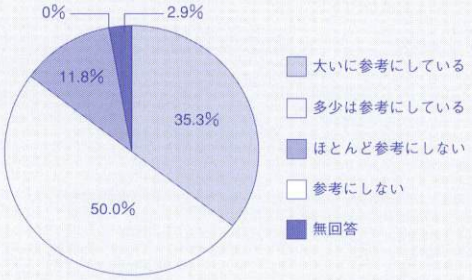
「授業アンケート調査」結果報告

本年１月に当センターが実施しました「授業アンケート調査」には68名の方に回答していただきました。ご多忙な時期にもかかわらず、ご協力いただいた皆さまに感謝いたします。年２回にわたり実施されている「授業アンケート」に関する教員の意識調査は初めての試みでしたから、調査の主旨など不明な点も多く、あるいは回答を控えられた先生方もおられるかもしれません。その意味で、必ずしも本学の状況を正確に反映した結果となっていないおそれもありますが、簡単に集計結果を報告させていただきます。

＜自身の授業への評価妥当性＞

①学生からの「授業アンケート」によるご自身の授業への評価についての考えをお尋ねしたところ、全体の73.5%（68名中50名）の先生が、「とても妥当である」もしくは「概ね妥当である」という回答を寄せられました。他方で、「あまり妥当ではない」と考えられている先生も22.1%（68名中15名）おられました。





＜参考にしていますか？＞

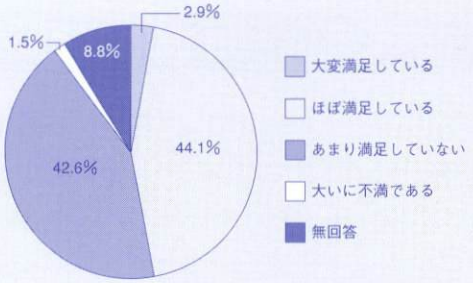
②「授業アンケート」の結果をどの程度参考にされているかの設問に対しては、全体の85.3%（68名中58名）の先生方が、「大いに参考にしている」または「多少は参考にしている」と回答されていました。

自由記述いただいた中から、具体的な参考例をいくつか紹介します（紙幅の関係で一部省略しました）。

・適切な授業外学習時間を課しているかなど、学生の学習チェックとして使用している。
・講義の評価について学生がどの点で不満に思っているかをチェックしている。
・学生が興味を示さなかった内容は次年度から省くようにしている。
・自由記述の内容について、教師として改めることが可能なものはなるべく努力している。
・プレゼンテーション方法の改善。妥当なコメントに対応する努力。テキスト・資料の改善。
・学生の理解度を深めるため。黒板使用法、マイク使用に際し、発声の点に注意（特に大教室については配慮）。
・授業の進むスピードや教材を毎年変更。
・配付資料と板書の関連等について受講者の理解しやすいように配慮する。
・授業の進み方の速度、資料の善し悪し等　次年度の時に参考にしてつくりかえている。
・次年度、講義配布資料の作成し直しに利用する。
・板書の方法　進行の度合いなど。

＜総合的な満足度は？＞

③「授業アンケート」の総合的な満足度については、「大変満足している」もしくは「ほぼ満足している」と回答された先生方は47.0%（68名中32名）にとどまり、反対に「あまり満足していない」もしくは「大いに不満である」との回答は44.1%にのぼりました。



自由記述していただいた中から、具体的な問題点に関する指摘をいくつか紹介します。

・無責任な授業評価をする学生も多くみうけられる。
・欠席の多い人、まともに勉強しない人、投げやりの人にまでとること。
・全科目で集中的に実施しているため、回答がいいかげんになっている。
・無記名のため、時々極めて失礼な暴言を書く学生がいる。記名式にして、責任あるアンケートにすべきと考える。
・自由に意見を書く学生が非常に少ない。
・途中リタイヤの学生の声がわからない。

＜よくするためには？＞

「授業アンケート」を改善するための方策として提案された点をいくつか紹介します。

・大学全体として、学部・学科教育の毎期チェックの一貫として授業アンケートをどのように分析していくか、よく検討をしていただけたらと希望します。
・３．４年の後期のより専門的性の強い科目については、全く別の評価方法が適用されなければならないのかもしれません。
・「授業アンケート」に答える学生を２／３以上の出席をしたものに限定する。
・回答者の匿名性を確保するための工夫を十分にこらした上で、学籍番号を記入する方式を採用しては如何でしょうか。
・教師による学生評価も大切で、学生と教師の回答の傾向と両者の不一致など、教師と学生双方にフィードバックできたらと思う。
・配布は授業内でよいが、記入・回収は授業内で行わず、専用の回収BOXで行うことが望ましい。
・全員が必ず記入提出するよう、時期と取り扱いを改善する。また学生自身の自己評価欄を設ける。
・学生に公表すべき。学生が履修の参考にできないようでは意味がないと思うから。教員相互の啓発という点でも公表すべき。
・出席率及び予習に費やした時間と理解度及び成績の相関データが欲しい。

＜コメント＞

アンケート結果を真摯に受けとめて授業を改善しようとする教員が大半である反面、遅刻や欠席が多い学生の回答に複雑な心境の教員が多いことがわかりました。当センターでは、皆様にご協力いただいた「授業アンケート調査」の結果を学長に伝えるとともに、これからも皆様と共に授業アンケートの有効利用について考えて参りたいと思います。

「協同学習法」研修会レポート

本年１月の第１弾に続き、４月にも協同学習法の研修会（ワークショップ）が開かれた。１月の講師は経済学部の高橋教授、４月は教育学部の関田助教授が担当された。お二人とも当センターから派遣されて、昨夏ミネソタ大学で行われた協同学習法ワークショップに参加している。アメリカでの研鑽の成果を後期の授業に活かした体験を交えた、実践的な内容は参加者からも好評を得たようである。ここで、２つの研修会の内容を簡単に紹介しておこう。

高橋先生の研修会

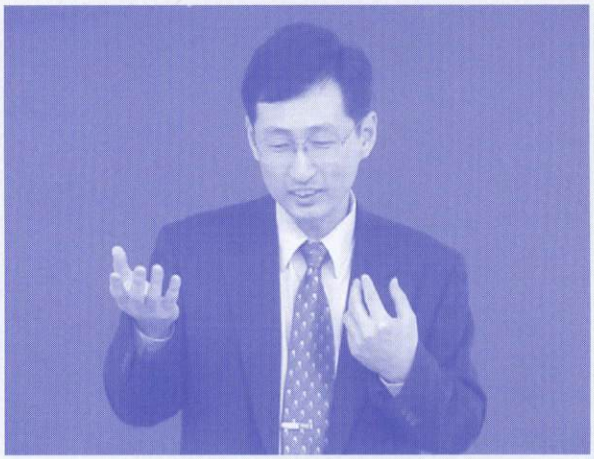
ミネソタ大学で研究･開発されている協同学習法にはフォーマル、インフォーマル、ベースという３つのタイプのグループが用いられる。その内で、高橋先生が主に紹介されたのはフォーマルグループの活用法であった。クラスを通常４人１組のグループに分け、グループごとに課題に取り組ませる指導法である。組織したグループは学期を通して替えないことを原則にしていることから、固定されたメンバーによる正規の（本格的な）グループ活動という意味でフォーマルグループと呼ぶ。

高橋先生ご自身の授業では、グループごとに短いレポートを毎回作成させたり（計10回）、グループ内で話し合う課題を用意したり、といった工夫が試みられている。むろん、短いレポートといえども何十通ものレポートを毎週点検するのは困難であるが、そのためにTAを活用している。高橋先生は協同学習法を試みて、従来の一方的な講義に比べると教員が話す内容は７割ぐらいになったが、学生の学習意欲や授業への満足度は確かに向上したという手応えを感じている。

●研修会に参加して●

私は、150～200名の履修者がいる講義科目を担当していますが、研修会に参加するまでは、大・中規模な講義には、協同学習法はなじまないのではないかと考えていました。しかし、協同学習法といっても様々な種類があり、Turn to your neighborのように隣の学生同士で授業内容を確認しあったり、議論したりする形態のものなら気軽に自分の授業にも生かせ、学習効果をあげることができるのではないかと感じました。また、先生方が工夫を凝らして、よりよい授業をするための努力をされている真摯な姿勢にも多くを学ばせていただきました。協同学習法を上手に活用できるには多くの経験が必要でしょうが、まずはできそうなことから取り入れていければと考えています。これからも、授業改善のためのスキームを提供する機会を多くもうけていただければ幸いです（法学部　宮﨑淳）。

関田先生の研修会



関田先生の研修会では、授業の流れに沿って適宜用いるインフォーマルグループの活用（二人～四人一組の話し合い活動）について、その留意点が大きく３点にわたって示された。まず、話し合うべき課題は出来る限り到達目標までハッキリ示す。次に、成果の確認手順（挙手や指名など）を組み込む。さらに折に触れて、話し合いの意義（集団思考の長所など）やルール（話し合いのマナーや役割の分担）を強調する。こうした点に配慮することで、次第に学生同士のディスカッションも深まるという。

●研修会に参加して●

「明日から使える協同学習法」のタイトルに惹かれて参加した。通常の授業でも、静かで落ち着いた雰囲気を作るために、学生間の「協同」が必要だが、今回学んだのは、より積極的な意味の「協同」であり、協同とは「互いの学びを気遣う」ことであるとの言葉は、とても印象的であった。通教の授業でグループワークをすることがあるが、それは、授業内容とは区別して、雰囲気作り、学生間の交流のためにしている。通常の授業で実践するには、趣旨の周知を図る、各授業の内容を精選する、段取りを考えておく、などが必要となろう。また、考え方・見方・感じ方など、態度を育てることをめざす授業に、よりふさわしい方法であると思った（教育学部　吉川成司）。

2002年度　CETL事業計画

＜学習支援業務＞

（講習会）各種講習会（勉強法アドバイス･レポートの書き方･高校数学補習）の開催

（個別相談）火･木･金の通常窓口対応

（その他）Web上での作文指導（前期準備、後期試行）

＜教育支援業務＞

（講演会）年２回を予定（第１回目は５月に慶応大学・井下理教授の講演会を開催）

（研修会）年２回を予定（第１回として４月に「明日から使える協同学習法」を実施）

（授業見学会）年４回を予定（第１回目は５月に長谷部経済学部教授の授業を見学）

（教育派遣）私大連講習会（7月）等、学外の研修会への教員派遣（数名）

（委託調査）国内外のFD関連の資料収集･動向分析に関する調査委託

＜広報事業＞

（広報紙）年4回発行

（FD冊子）２冊発行

●CETL所員一覧●

＜教　育＞　坂本辰朗（センター長）
＜教　育＞　関田一彦（センター長代行）
＜経　済＞　神立孝一・小林孝次
＜法　学＞　宮崎　淳
＜文　学＞　金子　弘
＜経　営＞　金子武久・岡田　勇
＜工　学＞　戸田龍樹・坂部創一
＜通　教＞　西浦昭雄
＜研究所＞　小出　稔
＜ＷＬＣ＞　尾崎秀夫

●information●

当センターでは、ＦＤ関連セミナーへの本学教職員の派遣を考えています。ご関心がある方は、５月中に当センター担当の松岡（内線：2145）までお願いします。

○大学教員懇談会「大競争時代における大学教員の生き方」（大学セミナーハウス主催）
　開催期日：2002年７月６～７日
　場所：八王子･大学セミナーハウス

○大学の教育・授業を考えるワークショップ（財団法人　私学研修福祉会主催）
　開催期日：2002年７月31日～８月２日
　場所：グランドホテル浜松

○教授法スキルアップ・セミナー
　開催期日：７月15日～19日／22日～26日（４泊６日）
　場所：アメリカ・ミネソタ大学

編集後記

●本号は「授業アンケート調査」の集計結果を掲載しました。授業改善に役立つ活用法を幾つか紹介しておりますのでご参考にしてください。

（N）

C. E. T. L.　Quarterly　No. 6

編集・発行
創価大学　教育･学習活動支援センター
〒192-8577　八王子市丹木町1-236
Tel：0426（91）9782　内線 2148
E-mail：cetl@s.soka.ac.jp